PROCEEDINGS 03 103–110
August 2008

現代中国の大学生にみる高齢者扶養・介護意識

薛　　迪

お茶の水女子大学グローバル COE プログラム

「格差センシティブな人間発達科学の創成」
PROCEEDINGS 03 Grant-In-Aid Research Awards
（公募研究成果論文集）

PROCEEDINGS 03　103-110
August 2008

現代中国の大学生にみる高齢者扶養・介護意識

薛　　迪
（人間発達科学専攻）

1. 背景と課題

本稿の目的は、現代中国の大学生を対象に行ったインタビュー調査の資料にもとづき、かれらの高齢者問題への認識を明らかにすることにある。

2000 年に行われた第 5 回人口センサスによれば、中国総人口 12 億 6500 万人のうち 65 歳以上の高齢者人口は 8811 万人（7.0%）に達し、60 歳以上の人口は 1 億 3200 万人（10.3%）に上った。また、1992 年の高齢者支援に関する全国調査（China Research Center on Ageing、1994）によると、60 歳以上の人の約 12.2%が一人暮らしをしており、高齢者夫婦のみで暮している人は 29.6%に及ぶ。長寿化と一人っ子政策の影響により、「4 人の祖父母、2 人の父母、一人の子ども」という「421 家庭」がますます多くなっている。また、中国においては公的福祉がいまだ整っていないため、都市部の中流階層などの過半数が「高齢者扶養の経済的圧力を感じている」ことが明らかとなり、「自分の老後生活が心配」との回答も 87.8%に達した。

現代中国の大学生たちは、1978 年の一人っ子政策の実施以降に生まれ、「421 家庭」を初めて経験している若者世代である。またかれらは、高等教育が大衆化しつつある現代中国においても、比較的恵まれた経済階層の家庭に生まれ育ち、今日にまで至っている。しかしかれらは、遠くない将来、祖父母や親の高齢期の扶養・介護問題に直面することになり、“一人っ子” 世代であることは、伝統的家族扶養をみずから支えていくには大きなハンディとして意識されるだろう。そのような立場にある大学生たちが、高齢者問題の現状や将来についてどのように評価し、見通しているかは、今後の中国社会における高齢化対策を大きく左右する要因になるものと思われる（包、2001）。

2. 先行研究と分析の視点

費孝通（1985）は、中国における親子関係を「フィードバック型」と名付けている。つまりそれは、親が子どもを養育し、子どもが長じては親を扶養するという権利・義務の双方向的授受を規範化するモデルである。一方西洋では、親は子どもを養育するものの、子どもからの扶養というフィードバックがない片道通行の関係であり、これを「リレー型」と名づけてマクロ的視点に立って東西の比較を行った。しかし、近年の中国では、改革開放政策以降の経済発展にともなって家族のあり方も変化し、親と娘夫婦との同居形態、経済的余裕のある親から子ども、孫世代への「リレー」養育など、老親扶養のあり方も多様化している（城本、2001）。

そのような状況の下で、中国の若者世代は老親扶養や高齢者福祉のあり方につき、どのような意識を抱いているのだろうか。包・浅野（2001）は、中国沿岸地域の大学生を対象に、老親扶養意識に関する調査を行った。その結果、男子が女子よりも扶養に肯定的であり、老親扶養に関しては、現状ではまだ伝統的な規範の影響が強いことを指摘している。

岸本は（2002）、改革・開放政策下の中国大学生の、家族生活や住生活に関する意識特性を考察した。その結果、大学生の意識には、近代合理的主義的な意識への変化が認められたが、家族生活に関しては家族連帯や家族交流への期待が依然として強いと指摘した。また彼は、中国国内で展開されている「親孝行キャンペーン」について、「最も難しい時期に高齢化問題に直面しようとしている中国社会の苦悩の反映であるとも言えよう。学生達の家族介護志向の傾向は、高齢者対策に自己責任を強く求める中国政府の政策目標を反映した結果とみられる」と述べている。これらの先行研究の知見から、近年の中国の激しい社会変動は、高齢者扶養・介護をめぐる多様な規範の並存状況をつくりだしているのではないかと推測される。

また、現代中国における老親扶養のあり方を考える上で、都市部と農村部における前提条件の違いを考慮する必要がある。中国は二元社会であるといわれ、都市部と農村部の所得格差は著しい。国家統計局の発表によれば 2005 年の都市部と農村部の所得格差は全国平均で 3.2 倍となってお

表１　調査対象者の基本属性一覧表

NO.	性　別	年　齢	大学所在地	学　年	収入/月	政治立場	家族構成
A	男	20 歳	北　京	大学 2 年生	仕送り 600 元	団　員	両　親
B	男	21 歳	北　京	大学 3 年生	仕送り 500 元	入党積極分子	両親、姉
C	女	26 歳	北　京	博士 1 年生	600 元補助、仕送り 600 元	団　員	両親、姉
D	女	27 歳	北　京	博士オーバー	1000 元以上	党　員	両　親
E	男	30 歳	北　京	博士オーバー	1000 元以上	な　し	両親、弟、姉
F	男	33 歳	北　京	博士 3 年生	1500 元	な　し	両親、弟
G	男	21 歳	瀋　陽	大学 3 年生	仕送り 4、500 元	団　員	両親、姉
H	男	21 歳	瀋　陽	大学 3 年生	アルバイト 500 元	予備党員	両親、兄、兄嫁
I	女	21 歳	瀋　陽	大学 3 年生	仕送り、金額不詳	党　員	両　親
J	男	22 歳	瀋　陽	大学 2 年生	仕送り、金額不詳	予備党員	両　親
K	女	29 歳	瀋　陽	博士 2 年生	1000 元以上	な　し	両　親

注: 元は中国の紙幣単位である。1 元＝約 15 円（2008 年 6 月現在の為替）

り、社会保障制度の差異などを考慮すると実質的な格差はさらに大きく、5〜6 倍にまで広がっているという見方もある。劉（2005）は、社会保障制度の改革において、都市部の改革が進む一方、農村部は遅れていると述べている。また賈強（2004）は、核家族、少子化（一人っ子政策）、共働きという中国都市部の家族構造の中で、家族が望ましい福祉機能を果たさなくなったが、都市では、年金や医療費などの社会保障制度が整備されたため、都市高齢者は子どもに経済的に依存する度合いが低下したと指摘している。したがって、出身地が都市であるか農村であるかの違いは、調査対象者の扶養意識に少なからぬ影響を与えるものと推測できる。

以上のことから、本稿では、高齢者扶養を高齢者一般、自分の親、自分自身の将来の 3 つの場合に分け、経済面、介護面、情緒面の 3 側面における扶養の現状と望ましいあり方を問う結果を分析することにする。高齢者扶養をめぐる社会制度や社会規範の変動期には、前述の 3 つの場合と 3 側面ごとに回答結果が異なるのではないかと予測されるためである。また、大学生たちの出身地や性別などの個人属性の違いが、回答結果にどのように反映されているかにも注目したい。

3. 調査の概要

(1) 調査対象

中国瀋陽・北京にある大学の大学（院）生 11 名。

中国瀋陽市、北京市にいる知り合いと社区役員を通して、ボランティア活動に従事していることを条件に紹介してもらった。

(2) 調査時期

瀋陽：2007 年 2 月、9 月

北京：2007 年 12 月

(3) 調査方法

半構造化質問紙を用いたインタビュー調査。各 30 分〜60 分程度のインタビュー調査を行い、IC レコーダを用いて録音した。

(4) 調査内容

高齢者扶養に関する意識、ボランティア活動の実態と意識、社会福祉に対する意識などを中心にたずねた。本稿では、この内、高齢者扶養に関する意識に限定して分析していく。

(5) 調査対象者の基本属性

11 名の調査対象者の基本属性を、表 1 に一覧した。

4. インタビュー資料の分析

(1) 一般高齢者の場合

①経済的扶養

高齢者一般の経済的扶養については、都市高齢者と農村高齢者のいずれを想定するかにより回答傾向に違いがみられた。都市高齢者の場合は、年金[1]や養老保険で生活しており、それらの公的保障では十分ではない場合は子どもに頼るという認識が中心であった。例えば A さん（20 歳、男）は、「都市の高齢者はほとんど年金をもらっているように思う。もしも（年金が）ない場合は、もちろん子どもに頼る。『養児防老』ということだよ」と述べた。C さん（25 歳、女）は、「まずは自分の貯金、次に医療保険。単

位（職場を指す）の医療保険。都市ではあまり子どもに頼らないわ。でも、医療保険が足らない場合は、子どもに頼らざるを得ないでしょう」と語った。都市部は農村部に比べて年金や医療保険などの制度が整っている。同時に、Eさん（30歳、男）が述べたように、「一組の夫婦が4人の老人を負担するから、（子どもからもらうお金が）少ない」という事情がある。一人っ子政策が浸透している都市部では、子どもに頼ることは困難になっているのである。

一方、農村の高齢者については、公的保障が整備されていないという前提での発言が大半を占めた。例えば、Kさん（29歳、女）さんは、「農村の高齢者は貯蓄と子どもからの仕送りが頼り。農村で企業もないし、保障も足りない。中国の農民が最もかわいそう」と語った。他には、Bさん（21歳、男）、Fさん（33歳、男）、Gさん（21歳、男）、Hさん（21歳、男）も同様の回答をしていった。とはいえ、頼りにされる子どもの経済力にも限界がある。このため、農村高齢者における経済保障の不十分さは、単に日常的な生活費の不足という問題だけに止まらない。Eさん（30歳、男）がいうように、「病気の時に病院へも行けない」という問題もある。

以上のように、若者たちは、都市と農村の高齢者における公的な経済保障の制度的格差を強く認識している。そして、農村高齢者に比べ、都市高齢者は公的保障の面で恵まれているという認識も共通していた。しかし、現状では、都市高齢者でさえ公的制度のみで経済生活の安定が得られるわけではない。このため、個人と国家の責任分担について、Hさん（21歳、男）は、「国家、政府は社会大衆にサービスすべきだと思うよ。でもすべての責任を国家に担わせるにはいかない」と述べていた。

調査対象者たちは個人責任を認める一方、経済生活への公的保障の制度確立を求めていた。

②身体的介護

身体的介護については、全般的に、子どもの責任という伝統的な家族規範が強調されたが、それだけではカバーできないニーズがあるという認識も共有されている。したがって、この欠落を共助、公助で補う必要があるという意見が多くみられた。

Iさん（21歳、女）は、「子どもが自分の両親や義理の親を世話することは当たり前だと思う。文句をいうべきないでしょう」と伝統的な家族規範を強調した。Aさん（20歳、男）も、「親にとって子どもが最も親密な関係だから、子どもにみてもらいたい人が多くいると思うよ」と述べた。

一方、家政婦やホームヘルパー、施設など、他人の援助を受けることについても、必ずしも否定的ではない意見傾向がみられた。国家や市場など、担い手の多元化を期待していることもよみ取れる。例えばIさん（21歳、女）は、次のように述べている。「敬老院（老人ホーム）がとても普及している。将来は、敬老院以外にも、いろいろな施設が出てくると思うわ。でも、現在中国では高齢者の人数がどんどん増えてきて、敬老院だけで足りないです。これからは、もっと多くの新しい施設がつくられるでしょう」。また、Fさん（33歳、男）は次のように述べた。「もちろん子どもや家族。でも、将来は、介護ヘルパーも増えていくかも。彼らを雇う人も増えるよ。今は人々の生活が忙しい。時間的な余裕がないよね」。Aさん（20歳、男）も、「子どもが（親の）傍にいなかったら、病院の看護婦（に頼るでしょう）。社区制度がよければ、ホームヘルパーを派遣してもらえるかも」と、外部の力に期待していた。Cさん（25歳、女）も同様の語りだった。

農村高齢者については、Bさん（21歳、男）はこう語った。「農村は一人っ子ではないから、家に残っている子どもがまだいる（から、介護を担う）。だから、子どもや両親の一人（病気がかかっていない一方）が世話をする。農村で家政婦を雇うなんて、あまり聞いたこともない」。都市部の介護問題への対処法の一つである家政婦は、農村部からの出稼ぎにより労働力が供給されている。調査対象者たちは、都市部に比べて農村部は、介護問題への対応策において選択肢が限定されていると認識していた。

③情緒的支援

一般高齢者の情緒的支援については、子どもの役割をもっとも重視する傾向が共通にみられた。また、都市と農村の高齢者の情緒的支援については、両方とも不十分という見解と、都市のほうが恵まれているという見解に分かれた。

Cさん（25歳、女）は、「すべての高齢者が子どもを最も頼りにしているでしょう。中国人は伝統的な思想を持っているというか、自分の家族がやっぱり最も心が通じ合うし」と語った。

都市と農村の差異については、Dさん（27歳、女）のように「都市、農村にかかわらず、経済、情緒、精神のすべでの面で子どもが中心」と差異を認めないという見解が主流であった。ただし、Hさん（21歳、男）は、都市・農村ともに子どもに頼れないという点で共通しているという。「農村高齢者の情緒的ニーズはほとんど満たされていない。例えば、僕は都市に進学し、卒業しても絶対に農村に帰らないから、実家にいる親に寂しい思いをさせるでしょう。都市部では施設や社区（コミュニティーを指す）活動が農村より多いけれど、高齢者の情緒的なニーズが満たされない点では農村と変わらない。最も頼りにしたいのはやはり子どもだから」。同様に、Gさん（21歳、男）は、「都市高齢者はとても寂しいと思うよ。隣に住む人のこと

でも、知らないことが多い。だから、子どもに頼りたくなる。そして、新聞やテレビなどで寂しさを紛らわしているんだよ」と述べている。若者たちは、都市・農村ともに高齢者は情緒的ニーズが満たされていないと認識している。

しかし、F さん（33 歳、男）のように、都市高齢者の豊富な社会活動の機会や場を評価する見解がある。「都市高齢者はいろいろものから精神的な慰めをもらえると思う。社区の高齢者活動や高齢者の趣味サークルなどがたくさんあるから。農村の高齢者は（娯楽活動が）少ないよ。高齢者たちが集まって、トランプをやるぐらい。社区もないし、活動がすごく少ない。だから、子どもが支えだけど、孫と一緒にいる時間も楽しいでしょう」。

情緒的支援については、子どもの役割を重視しながらも、その役割を十分に果たせない事情があることが強調された。これに代わる情緒的ニーズ充足の場として、地域の社会活動に期待されており、その点では都市部のほうが恵まれているという認識がみられた。

(2) 自分の親の場合

①経済的扶養

自分の親の経済的扶養については、都市出身者と農村出身者において、見解が分かれた。都市出身者である J さん（22 歳、男）は、「私の父母のように保険に加入していれば、それで生活できるよ」といい、C さん（26 歳、女）も、「今は親がまだ働いているし、（将来は）主に単位の（養老）保険によって経済的支援をもらうことができるから」と語った。また、H さん（21 歳、男）は次のように述べている。「経済面で、今は両親が自分たちの収入で生活しているから大丈夫だよ。僕は親に頼らないで、生活費などをまかなっているし、いい息子だと思うよ。親は自分たちで生活費を稼いでいるけど、兄は多少経済的な援助をしてあげているよ」。

一方、農村出身の F さん（33 歳、男）は、次のように語った。「親が農村に住んでいるから、年金はもらえないんだ。今はほとんど貯金で生活している。将来親は僕と弟に頼ると思うよ。まさに『養児防老』ということだよ。農村には農村の実情があって、保障制度がない。最近農村医療保険という制度ができたけど、内容はよく知らないな」。農村で暮らす E さん（30 歳、男）の父母も、一般的な年金支給年齢に達しているが、年金はもらっていない。「（父母は）僕たちきょうだいが経済的に支援している。それでも、我が家はまだマシな方だと思うよ。きょうだいが多いから」と語った。一人っ子政策が実施されている今日でも、中国農村部の合計特殊出生率は約 2.7 人で、人口置換水準は超えている。一人っ子政策が厳しく施行されてきた都市部と比べ、E さんの両親のような農村高齢者は、複数の子どもたちが分担して扶養している。そのため、農村では子どもの人数が多ければ、親の扶養においては安心感があるようだ。

概して、両親がまだ現役で働いている場合は、親自身の自助が経済生活の柱であり、子どもの立場からは親の老後生活を楽観的に考えている。B さん（21 歳、男）は、「将来のことを考えると、両親には退職金と年金があるから、自分たちのお金で生活できると思うよ。子どもたちからの経済援助はほとんどいらないよ」と語っていた。また、A さん（20 歳、男）は、つぎのように述べている。「母さんは、老後は僕に頼らないって言っている。迷惑を掛けたくないんだって。でも僕は経済面で彼らに援助したいよ。父さん、母さんにとても感謝しているから。将来は絶対面倒みてあげる。でも、（親は年金をもらえるから）僕が経済支援をしなくても、自分たちで自立していけるよ」。彼は親の経済的自立に期待しながらも、伝統的な扶養意識も強く持っている。

②身体的介護

親が介護を必要とするようになった場合、誰が介護するのがよいかとたずねたところ、多くの調査対象者は、「家族・親族」を挙げ、この回答に男女差は見出せなかった。中国の伝統社会では、息子の扶養・介護責任を重く見る意識傾向が強かった。しかし、一人っ子政策の実施以降は、国家が「生一个孩子好、生男生女都一样（子供を一人だけを産むのがいい。息子と娘は同じだ）」というスローガンを掲げ、次第にその理念は社会に浸透していった。老親の扶養・介護においても「男女平等」意識が徹底しているようだ。例えば H さん（21 歳、男）は、「親の介護は、子どもが中心になるのがいい。娘や息子は関係ない」と述べている。

調査対象者たちは、全員が都市部の大学に在籍している。そしておそらく全員が出身地にかかわりなく、将来は都市部での就職を希望している。このことは、親が介護を必要とするようになったときの、自分と実家の「距離」の問題として意識されるだろう。

実家を出て学寮に住み込んでいる F さん（33 歳、男）は、「親が病気になったら、親戚に頼むよ。僕と弟が傍にいられないから……」と語った。また農村出身の G さん（21 歳、男）は、「僕は帰れないから、親が自分たちで頑張るしかない。親戚や友人が親の近く住んでいるから、手伝いをしてくれるだろう」と語った。

さらに、A さん（20 歳、男）は次のように語った。「父母が病気になったら、もちろん僕に帰ってほしいと望むと思う。僕は絶対時間を作って（帰る）。でも毎日行くことはできない」。C さん（26 歳、女）も、「介護が必要な場合は、私の姉さんが近くに住んでいるから、主に姉さんが

両親の面倒をみてくれると思う」と述べている。他には、Hさん（21歳、男）が、「僕は農村を出て大学に進学したから、今後絶対に農村に帰らない。だから、両親の介護は兄に頼むしかない」と述べていた。特に農村部出身の大学生たちは、卒業して都市生活に定着する傾向があるため、農村に暮らしている親の介護は地元に残るきょうだいや親戚に期待する傾向がみられた。

③情緒的支援

親の情緒的支援についてたずねたところ、自分たち子どもの役割であるという回答が圧倒的に多かった。

Jさん（22歳、男）は、「私たちが親を訪ねていって、精神的、心理的に支えてあげれば、父母の寂しさも紛れるだろう」と述べている。Iさん（21歳、女）は、「情緒的な面では、もちろん子どもが最も重要だと思うわ。私の両親はもう50歳を過ぎているので、子どもとのコミュニケーション、子どもからの気配りをとても望んでいると思う。なんと言っても、子どもの存在が慰めになるんじゃないかな」と、子どもの役割を強調した。

農村出身のEさん（30歳、男）は、「僕と親は互いに情緒面で支え合っている。情緒的な面では、農村の高齢者は都市（の高齢者）と同じだよ。親の子どもに対する愛情や期待は、子どもの親に対する感情と同じで相互的なものだよ」と語った。経済的扶養の面では、都市と農村の制度的な違いもあって、都市出身者と農村出身者の回答の差異は大きかったが、情緒的支援に関しては「同じ」であることが強調されている。また、情緒面においては、親子が互いに支え合うことの重要性も指摘されていた。

子ども以外では、隣人を頼りにしたり、両親が互いに支え合うことの重要性を強調する意見もあった。Bさん（21歳、男）は、「僕が家を出て（勉強中で）、両親と会って話す機会は多くないから、両親の精神的な支えになることは難しいね。父母がお互いに支え合うしかないかな」と、両親の夫婦関係に期待していた。Gさん（21歳、男）は、「（情緒面の支援を）いつも隣人にお願いしている。親は僕にちょくちょく帰ってきてほしいようだけど、勉強のため、年に一、二回しか帰れない。だから、親はたいてい近隣の人たちと一緒に楽しんでいるよ」と語った。調査対象者たちは、子どもの役割を重視しながらも100%その役割を担うことは難しいと感じている。このため、近隣や友人のネットワークによる情緒的支援にも期待を寄せていた。

(3) 自分自身の老後の場合

①経済的扶養

自分自身の老後の経済生活についてたずねたところ、調査対象者は自分の貯金、保険で生活できるという回答が中心であり、将来を楽観視する傾向が見られた。そして、この点においては、都市、農村の出身地による差異はみられなかった。

例えば、Bさん（21歳、男）は次のように語った。「若いうちに頑張って働いて儲けたお金と保険で老後の生活を送りたい。僕の性格は、自分自身のお金で生活して、他人からの援助に頼りたくないから」。また、Kさん（29歳、女）は、「自分の力で生活するわ。若いうちにちゃんと貯金しなきゃ。投資や資産運用などの情報が頭にいっぱい入っている」と述べている。

同様に、「若いうちに十分のお金を貯めたい。子どもには頼らないと思うよ。若い時の貯金で生活するから」（Cさん：25歳、女）、「僕は自立できると思うよ。他の人に迷惑をかけたくないから」（Gさん：21歳、男）などの発言がみられた。このGさんは、次のようにも語っている。「中国で『久病床前無孝子（長患いをすれば、孝行な息子もいなくなる）』という諺がある。そうなりたくないので、できれば自分自身で老後生活を送りたいね」。全般的に若者たちは、若いうちに自分が頑張って老後の備えをするという意識が中心であった。

ただし彼らは、子どもからの援助をまったく否定しているわけではない。むしろ彼らの発言には、子どもの生活に配慮し、子どもの都合を優先するという意識傾向が表れていた。Kさん（29歳、女）は、「子どもには子どもの生活や仕事があるから、私たちに『お金ちょうだい』とは言えないでしょう」と述べている。またAさん（20歳、男）は、「もし将来年金ももらえるなら、子どもには迷惑をかけない」と述べた。Dさん（27歳、女）、Eさん（30歳、男）、Fさん（33歳、男）、Iさん（21歳、女）も同様に語った。全般的に、年齢、性別、出身地にかかわりなく、子どもや他の親族に迷惑を掛けたくないという回答が多く見られた。

調査対象者たちは、親の場合と高齢者一般においては「親孝行」を強く強調したのに対して、将来の自分自身の老後生活では子どもの扶養に期待していない。彼らは、伝統的な家族扶養の規範意識が弱まっていくことを予測しているようにも思われる。

ただし、自助だけで老後生活が支えられると考える人にほとんどおらず、年金や医療保険など公的制度への期待は高いものがあった。「今は養老年金制度があるし、僕が働いている間にお金を貯められるし、（年金と）貯金で生活するだろう」（Hさん：21歳、男）、「単位は一定の給料しか支給しないから、社会保険に加入すべき」（Jさん：22歳、男）、「若いうちに加入した養老医療保険など（で生活をまかないたい）。社区も頼りにしたい」（Iさん：21歳、女）などの回答がみられた。

②身体的介護

一方、将来の自分自身の介護については、経済的扶養の場合とは豊なり、家族扶養に期待する回答が多かった。例えば、H（21 歳、男）さんは、「介護の面でも、最も頼りにできるのは子どもだよ。子どもと親戚。血は水より濃く、子どもは血縁があるから、他人よりよく面倒をみてもらえるよ」と語った。D さん（27 歳、女）も、「もちろん子どもに最も期待しているわ。『親孝行』は子どもにやるべきことだと思うよ」と述べていた。

しかし、現状でも競争社会の圧力は増大し，子どもたちが老いた親をかえりみる暇がなくなりつつある。将来の高齢者介護はいっそう家族介護に依存しがたくなると予測する人は、「家政婦を雇う」などの社会資源の活用に期待を寄せていた。例えば C さん（25 歳、女）は、「自分が病気にかかった時は、私の子どもに最もみてもらいたい。でも、子どもができない状況なら家政婦を雇うつもりよ。また、ボランティアに手伝ってもらうことにも抵抗はないわ」と述べていた。他に、D さん（27 歳、女）、H さん（21 歳、男）も、ボランティアに介護してもらうことに抵抗はないと答えた。

また、農村出身の F さん（33 歳、男）は次のように語った。「夫婦がお互いに介護するかも。経済的余裕があれば、人を雇いたい。本当は、子どもに一番みてもらいたいね。でも現実的には、子どもは毎日看病はできないでしょう。親不幸とも言えないよ。しょうがないね。私も農村の実家になかなか帰れないから、分かっているよ」。前項の経済生活の維持の場合と同じく、子どもの都合を優先しなければならないという意識がうかがえる。

③情緒的支援

最後に自分自身の老後生活における情緒的支援についてたずねたところ、家族・親族への期待は高いものの、子どもに限定せず、配偶者、親族などより広い範囲が想定されていた。例えば C さん（26 歳、女）は、「パトーナと子ども。最も親しい人だから」と述べた。D さん（27 歳、女）も、「精神的な面では、もちろん自分の配偶者（に最も頼る）。夫婦で人生を一緒に歩みたい」と語った。A さん（20 歳、男）、K さん（29 歳、女）も同様の回答をしていた。

さらに、家族による支援を絶対視するのではなく、施設や社区などの公的サービスにも期待が寄せられていた。例えば、H さん（21 歳、男）は次のように語った。「もちろん子ども（に頼る）。それから社会からも一定のサービスを提供してもらえるだろう。今は高齢者問題が社会問題の一つだから、将来（高齢者にサービスを提供する）組織や施設が増えてくるでしょう」。同様に I さん（21 歳、女）は「社区の老人ホーム」を、G さん（21 歳、男）は「社区の高齢者や、社区の人（と付き合っていく）。社区高齢者活動センターなど」を挙げ、公的施設における他者との交流に期待していた。また、F さん（33 歳、男）がいうように、「自分の興味をちゃんと持っていれば、老後を楽しく暮らせる」など、自分個人の生き方の問題だとみる見方も示された。

高齢者一般や親の場合に比べ、高齢期の情緒的支援を子どもの役割とみなす意識は弱く、自分の努力や夫婦間の支え合い、地域の人々との交流などにそのニーズ充足を期待する人が多くみられた。

5. まとめ

本稿では、中国瀋陽・北京に在住する大学生を対象に行ったインタビュー調査の資料にもとづき、かれらの高齢者問題への認識について分析してきた。具体的には、高齢者一般、自分の親、将来の自分自身の 3 つの場合につき、経済的扶養、身体的介護、情緒的支援の 3 側面における現状とあるべき姿について、かれらがどのように認識しているかを分析してきた。

最後に、全体を振り返って、調査対象者の意識傾向の主要な特徴を 3 点にわたってまとめておく。

第 1 に、経済・介護・情緒の 3 側面とも、一般高齢者の場合と自分の親の場合は比較的類似した回答が得られたのに対し、自分自身の老後については、それらとは異なる意見傾向がみられた。具体的には、自分の老後における経済生活は、若い内からの自分の貯金や公的な社会保険などでまかなえると楽観視しており、子どもからの支援への期待は、高齢者一般や自分の親の場合に比べて弱いものにとどまっている。介護については、高齢者一般と自分の親の場合は、「子どもの責任」がもっとも強調されるのに対し、自分自身の場合は、子ども、配偶者、家政婦、ボランティアなど、多様な主体でその負担を分かちもつことが期待されていた。情緒的支援も同様に、子どもだけでなく、配偶者や他の親戚、近隣の人たちとの交流など、多様な主体が想定されていた。このような傾向は、調査対象者がまだ数十年後の自分自身の老後を真剣に考えていないとも考えられるが、一人っ子世代であるかれらが、中国において急速に変わりつつある家族のあり方を敏感に感じ取っていることが推測される。実際、調査対象者のなかには、「子どもには期待したいが、子どもの都合や事情を優先したい」という発言もみられ、アンビバラントな意識をうかがわせた。

第 2 に、3 つの場合を通して、経済的扶養は身体的介護、情緒的支援に比べ、もっとも公的支援の重要性が強く認識されていることが確認された。ただし現状では、都市部と農村部における年金や医療保険の制度的格差が大きく、都

市部においては公的制度が中心という認識であるのに対し、農村部では子どもによる扶養が中心であり、子どもの数が多いことが老後の経済生活を保障する鍵になるという認識が主流であった。自分自身の老後の経済生活に関しては、都市部と農村部との対比で語られることはなかったが、これは農村部出身の調査対象者も、将来的に都市に定住することを想定しているためだと推測される。また、3つの場合を通して身体的介護に関する公的支援への期待が弱いのは、現代の中国都市部においても、家族介護が困難な場合は、家政婦の雇用などの私的な対処以外に有効な手段がなく、将来的にも公的なホームヘルパーの利用などを想定することが困難なためではないかと思われる。

第3に、社区福祉を推進しつつある都市部に関しても、調査対象者におけるその実効性への認知や評価は必ずしも高いものとはいえないことが確認された。社区福祉として行われるさまざまなサービスの内、調査対象者がもっとも評価していたのは、社区高齢者活動センターなどにおける高齢者の社会参加や交流であり、3つの側面でいえば情緒的支援にかかわるサービスであった。他には、自分自身の老後の身体的介護において、ボランティアの活用に言及したものが数名いた。ボランティア活動に従事することを条件に選定した調査対象者の割には、自分や親が実際にそのサービスを受けることは想定されていなかった。中国社会における地域を基盤とした共助システムの定着は、なお今後の課題といわねばならない。

（注）

1　年金制度：中国では以前より退職高齢者に対する年金は生活保障制度として、自分が所属していた団体が生活を生涯にわたり保障する制度となっており、退職積立金制度がある無しにかかわらず、基本的に企業等が年金支給の義務を負うものであった。しかし、高齢化が徐々に進展する中、改革開放の進展と共に企業が一方的に資金を負担する制度は企業の競争力低下に繋がるとして、1990年代後半に、現在のような一部自己負担を伴う年金制度が誕生した（〈HSBCの中国情報〉2004/7/21 webから）。都市部での対象者は、国有企業及び都市の集団企業に属する労働者、外資系企業、都市部私営企業、その他企業に属する労働者、自営業・起業者に対象としている。現在の年金加入者数（労働者のみ、退職者含まず）は1億1,647万人に達し、都市戸籍を持つ人口に対する加入者の割合は2003年時点で45%となっている（中国労働和社会保障部、2003）。この年金制度の背景の下に、上述した対象者の語りとおり、単位福祉が弱体化しつつある中で、単位福祉を受けている人もいると分かった。

（文献）

費孝通（横山廣子訳）（1985）『生育制度―中国の家族と社会』東京大学出版会、P 305-309

包敏・浅野仁（2001）「中国沿海地域の大学生の老親扶養意識」関西学院大学『社会学部紀要』第89号　P 185-193

城本るみ（2001）「中国知識層の高齢者扶養にみる親子関係」弘前大学人文学部『人文社会論叢』第5号　P 1-18

賈強（2004）「変革期における中国の社会福祉――現段階の社会福祉における家族、組織と市場の役割」『文教大学国際学部紀要』第15巻1号　P 133-145

岸本幸臣・宮崎陽子・趙穎（2002）「中国の大学生にみる生活意識の特性――日中比較の視点から」『大阪教育大学紀要』第Ⅱ部門　第50巻　第2号　P 65-78

劉小梅（2005）「中国における社会変動と社会保障制度改革」千葉大学　『公共研究』第2巻第2号　P 5-19

中国労働和社会保障部（2003）『中国労働統計年鑑』

China Research Center on Ageing（1994）A data complication of the survey on china's support system for the elderly, Beijing: Hua Ling Press

PROCEEDINGS 03
August 2008

University Student's Underlying Thoughts About the Support Given to the Elderly in China

XUE DI
(Human Developmental Sciences)

The aging of population is becoming a serious issue in the social development of China in the 21st century. Single couples taking care of as many as four elderly persons are common these days and with the execution of 'One-child' policy in China there are not enough children to take care of the elderly. The Chinese government has launched a special welfare program for the elderly, to which government, community, family and the individual contribute together. However, family responsibility is still regarded most important as it used to be in Japan before the state stepped in to provide laws and insurance for the same.

The purpose of this research note is to grasp the underlying thoughts among university students (the undergraduate and graduate student) from rural and urban areas in China and find out the mechanisms in place for support to the elderly. Therefore, their opinions about who should be mainly responsible to give support to the elderly and other information are analyzed in three aspects. These aspects include economic support, daily care and maintenance, and psychological/moral support.

This work is based on the results of the interviews conducted among university students in China. From the viewpoint of filial duty, the traditional responsibility of looking after the elderly is still incorrigible. However, the students from urban areas differed from the ones in rural areas in the level economic support given to the elderly.

Keywords: aging of population, underlying thoughts about the support given to the elderly, university student, China